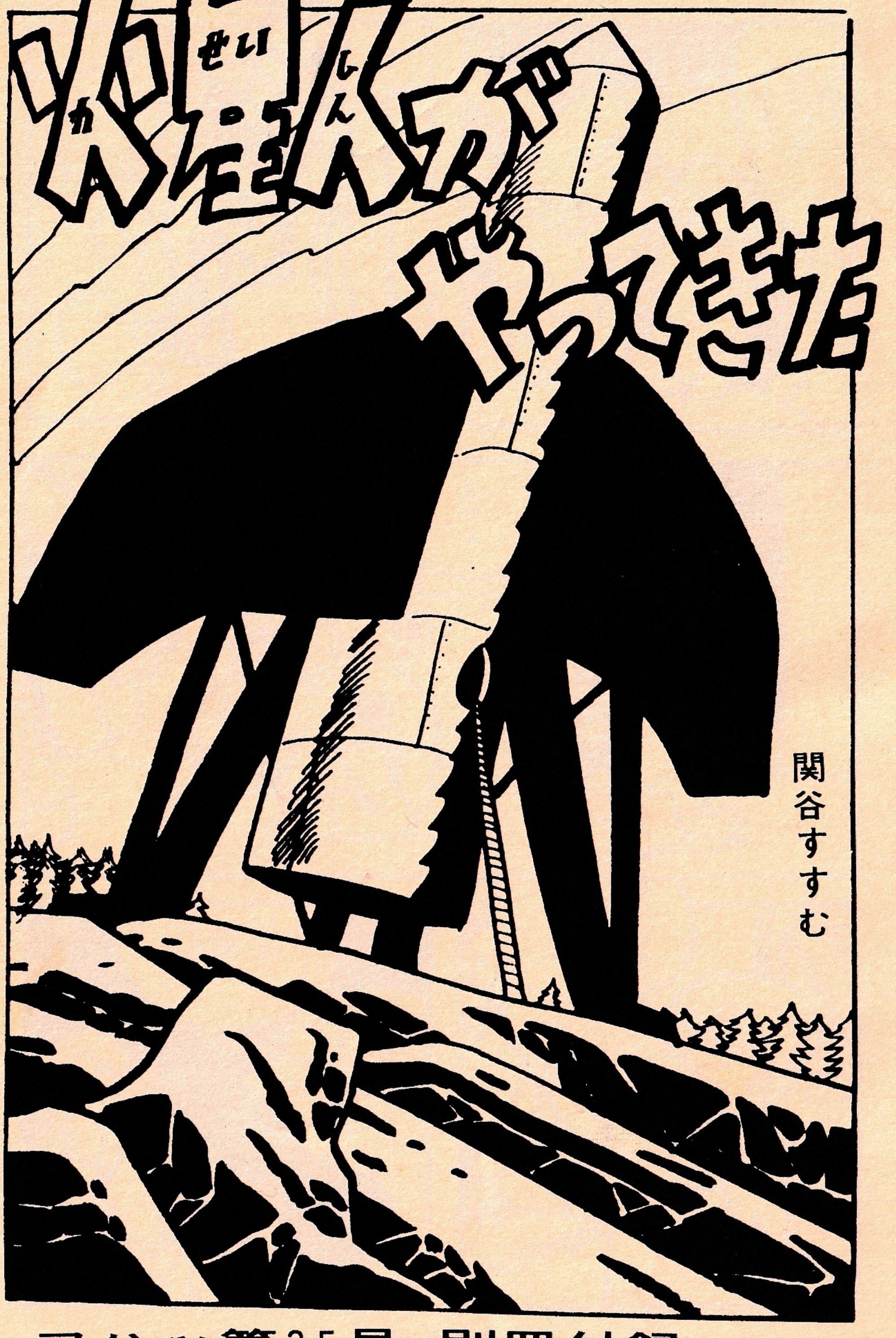
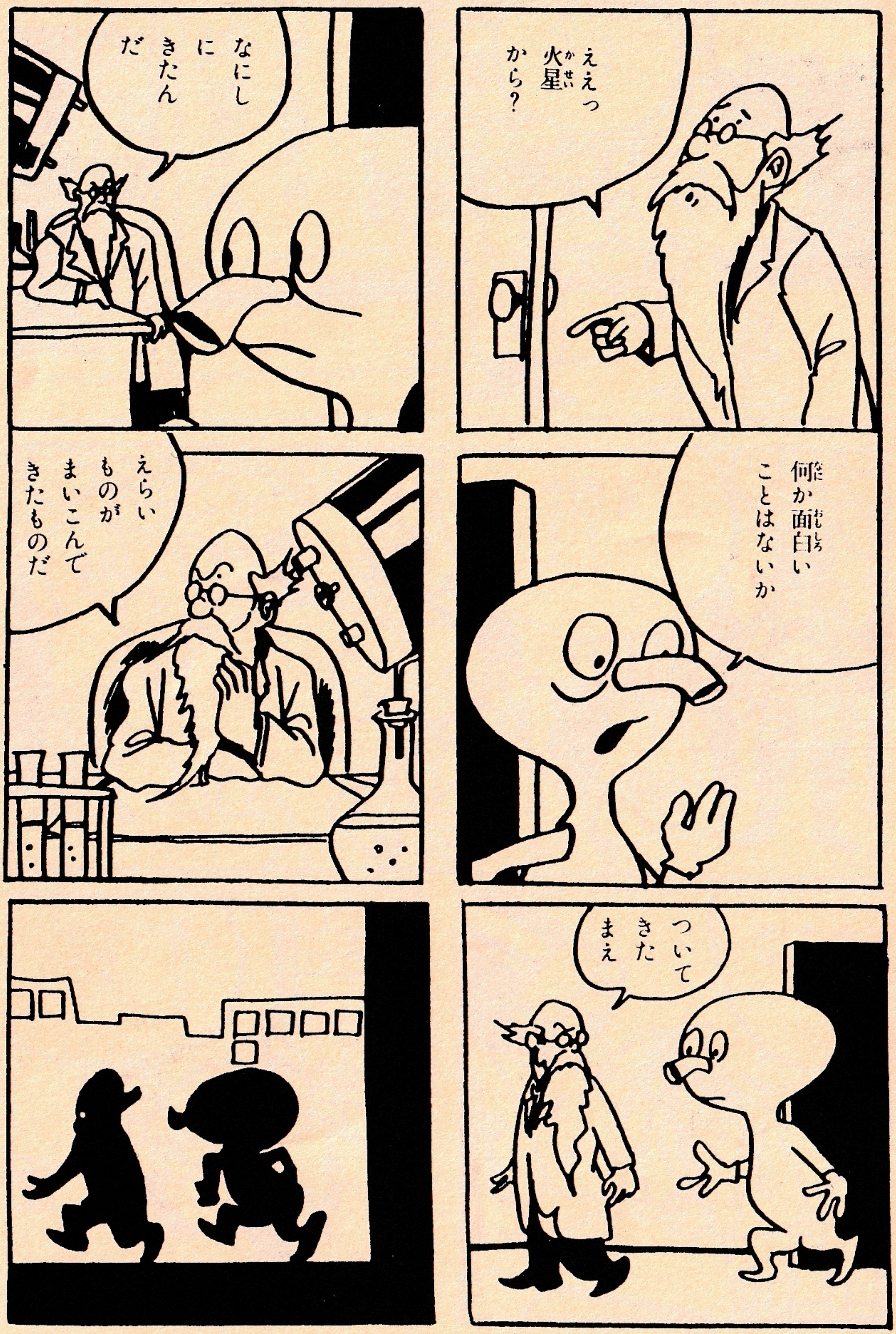
火星人(かせいじん)がやってきた

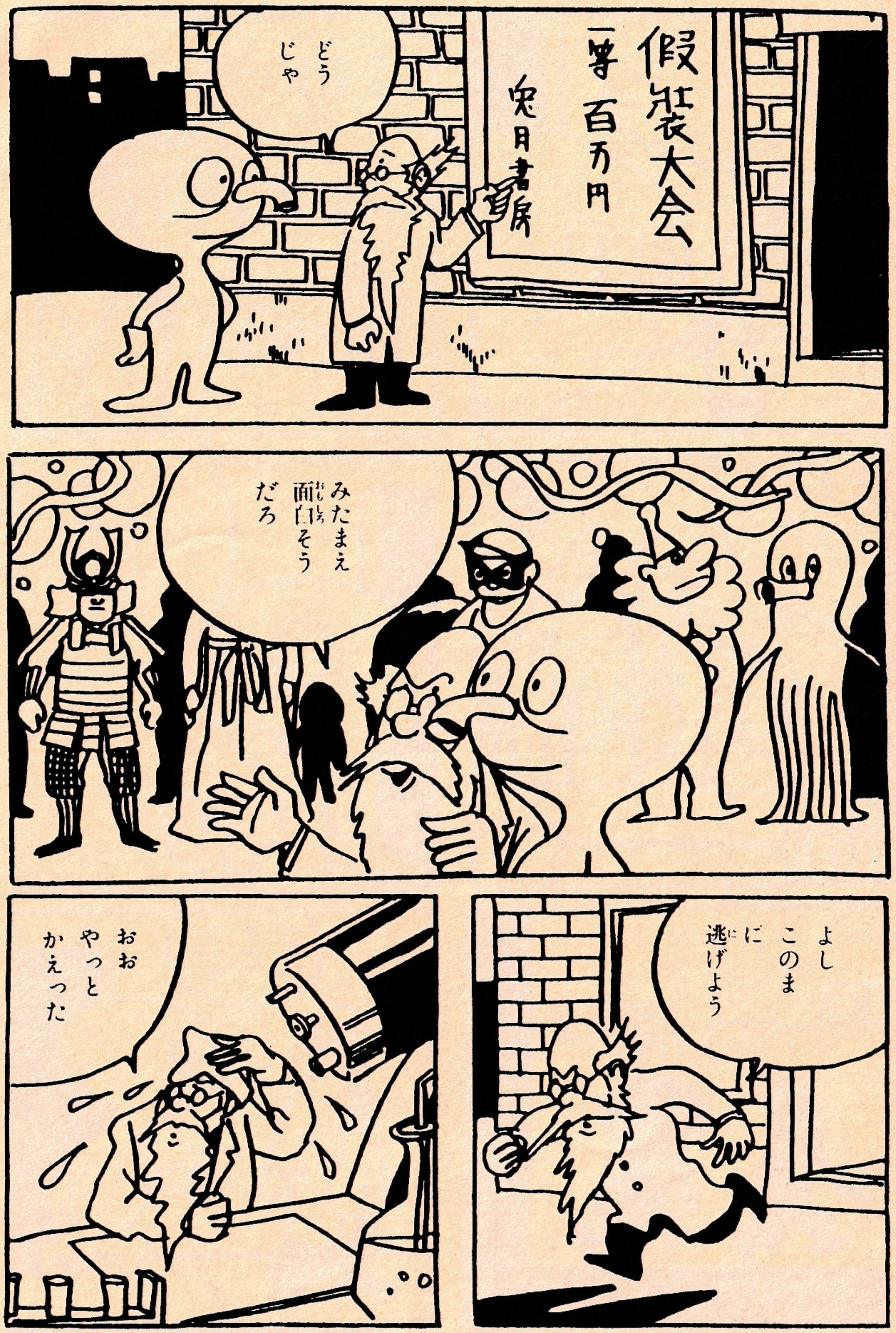


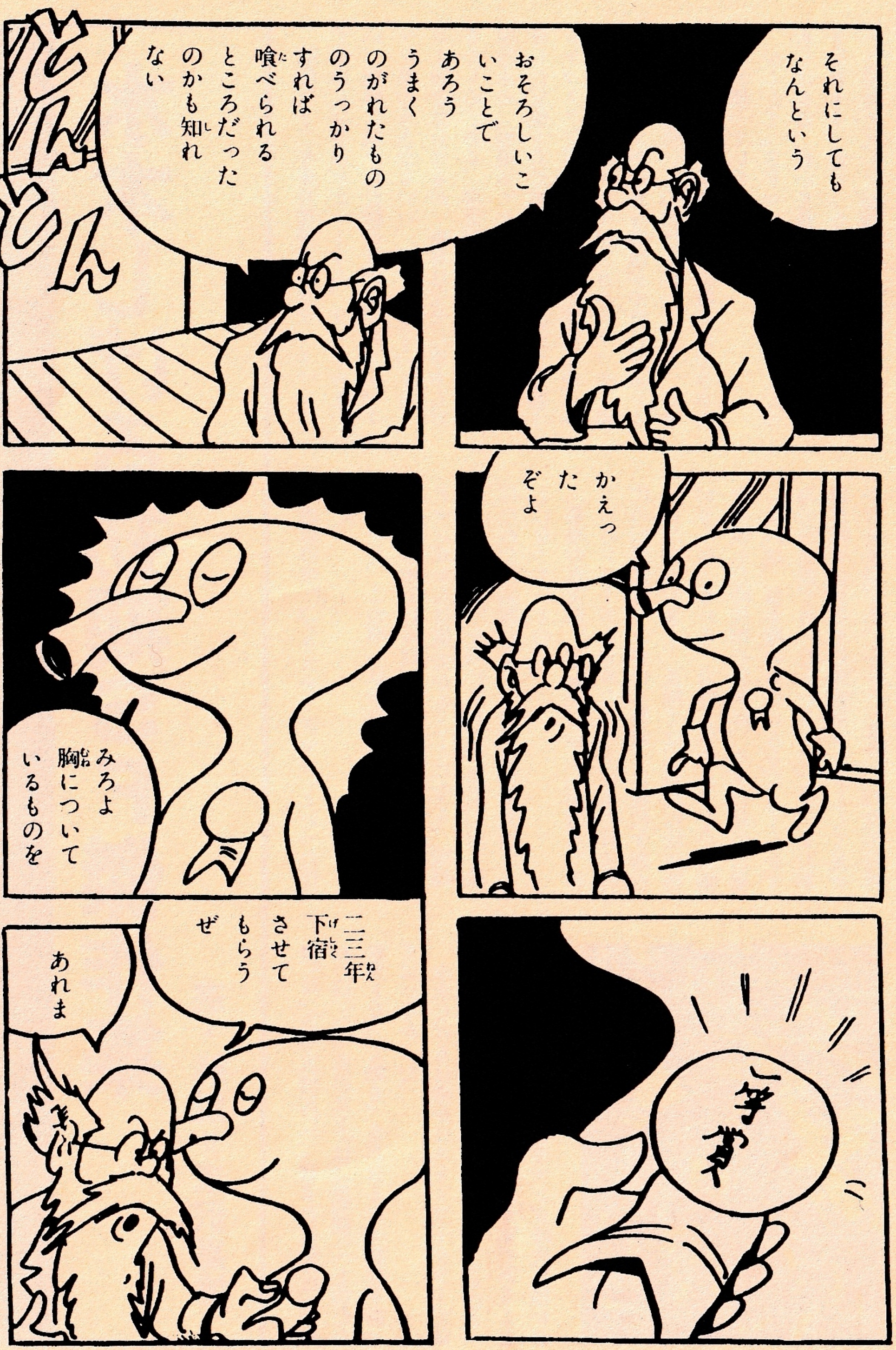
関谷すすむ

フハッ第35号　別冊付録


らんぼうな人だな お入り
おっ
ごめん
きみは何者だ？
ぼくは火星人だ!!


ええっ火星から?
なにしにきたんだ
何か面白いことはないか
えらいものがまいこんできたものだ
ついてきたまえ


假裝大会
一等 百万円
兎月書房
どうじゃ
みたまえ面白そうだろ
よしこのまに逃げよう
おおやっとかえった


それにしてもなんという
おそろしいこいことであろううまくのがれたもののうっかりすれば喰べられるところだったのかも知れない
どんどん
かえったぞよ
みろよ胸についているものを
一等賞
二三年下宿させてもらうぜ
あれま

水木しげる初期SF傑作集

選・解説＝米沢嘉博

昭和三十二年兎月書房の「ロケットマン」で水木しげるはデビューする。タイトルといい、表紙に描かれた胸のRの文字のスーパーマン風の主人公といい、一見してスーパーヒーロー物を思わせるが、中身は完全に水木しげるのものである。設定は同年に連載された手塚治虫の「施風Z」と似ているが、怪物に変身した父親と共に悪の科学者怒雷博士と闘うロケットマンは見事なまでに水木的であった。もちろん、怪物グラヤがアラエッサッサと踊り出すシーンや巨大な眼球が中空に浮ぶシーンは奇妙な笑いと幻想性を持っており、日本の首相が出てくるあたりには既に後の水木の匂いが漂っていた。

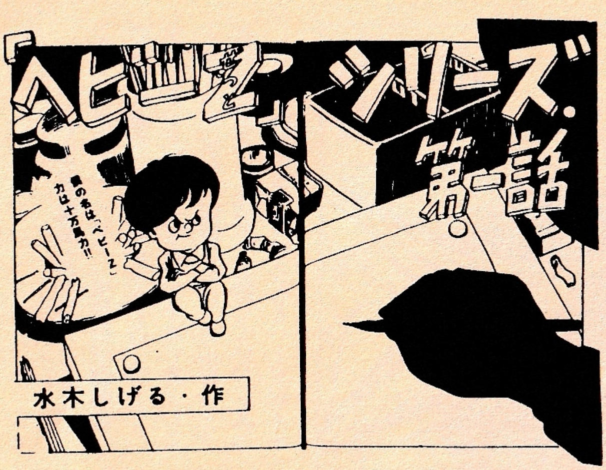
かくして「SFマンガ」でデビューした水木しげるは、続いて幾つかの長編SFマンガを発表する。後に「ないしょの話」「大海獣」へと派生していく鯨神の話「怪獣バラン」や「地獄の水」「プラスチックマン」といった作品だ。

しかし、この頃「妖奇伝」で鬼太郎を登場させた水木しげるは、この後正面きってのSFマンガからは遠去かることになる。短編「サイボーグ」を別にすれば、怪奇幻想と銘打たれた作品群にSFへの指向性を見出すことになっていくのだ。

「墓場の鬼太郎」「河童の三平」「悪魔君」の三つのシリーズを含めた水木しげるの貸本時代の幻想怪奇マンガは、短編では現代を舞台にしたものが多く、長編では圧到的に時代物が多くなっている。当時人気のあった小島剛夕に模した時代物の表紙は、水木自身の言葉によれば、貸本屋のおばはんをだまくらかす為の役者絵であったというわけだが、また別の意味ではSFを幻想怪奇マンガとして見せかける手段であったともいえる。「73光年の妖怪」は「古墳大秘記」へ、「盗まれた街」は「呪われた村」へ、「炎の女王」は「猫姫様」へと新たな世界となって甦る。SFはまだ一般性を持ってはいなかった。

水木しげるは確かにストーリーテラーではないかもしれないが、確固たるスタイルによって幻想世界を描いてきたマンガ家であることは言うまでもない。貸本マンガ時代に描かれ







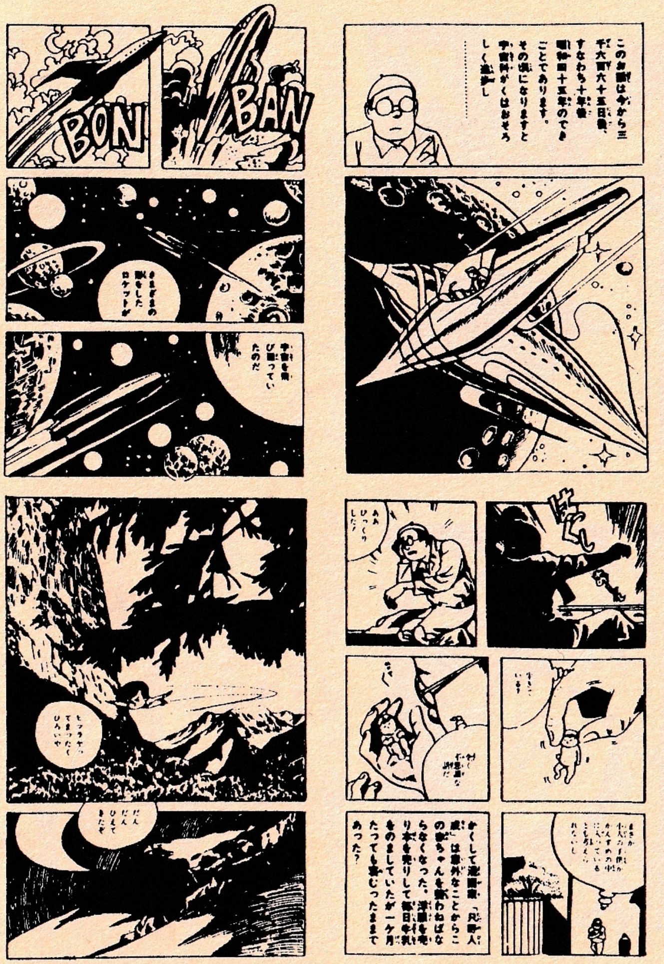
たSF的作品群の多くはまぎれもないセンスオブワンダーを煌かせていたわけだし、「化鳥」「火星年代記」「悪魔君」といった作品は、手塚体系とはその世界を異にするSFマンガの名作であったといえるだろう。

なにしろ、水木しげるの貸本時代の主なレパートリーは戦記物と怪奇幻想物の二つだったのだ。後者は、SF、怪奇、幻想、ファンタジーを含む水木世界の大半を占めている。これ以外に彼は少女マンガやコメディを手がけたこともあるが、水木自身が主催していた二つの研究会の性格を考えれば戦記物と怪奇幻想SF物こそ水木しげるの目指すものであったことがわかる。

さて兎月書房時代に作られたこの二つの研究会のうちの一つは、ヒモト太郎等も参加していた少年戦記の会であり、もう一つが少年コミック研究会である。前者についてはあちこちで書かれておりかなり有名であるが、後者は「宇宙少年」「妖奇伝」の編集にあたっていたということしかわからない。当時「影」や「街」等の短編誌の編集を「劇画工房」等が担当していたというやり方にならってつけられたものと考えられる。

たぶん昭和三十四年頃に二冊だけ出たこの「宇宙少年」というSF劇画短編集は表紙に小松崎茂を用い、巻頭の「宇宙の悪魔」を萩原孝治、「月世界旅行」を伊藤正樹という挿絵画家に任せている。そしてそれ以外を全て水木しげるが埋めているのだ。巻末の「ベビーZシリーズ・水人間現れる！」の五十八頁を始めとして、「宇宙船の話」といった記事頁や目次、そしてここに復刻された「アマゾンの奇妙なもの」「火星人がやってきた」といったショートショートが水木しげるの手によるものだ。

しかもこの二作のショートショートは水木名儀になっておらず、それぞれが武良茂（水木の本名）と関谷すすむというペンネームになっている。たぶんこの二作品は本のバランスを整える為に、あるいは穴埋めの為に描かれたものかもしれない。それでなくては、貸本マンガの短編は最低でも三十二頁という常識からはずれてしまう。そういったことを前提としても、この二つのショートショートには水木しげるのスタイルがはっきりと現われている。それは日常の中に潜む不可思議なも



のだ。
　こういった作品を掲載していたことからも、この「宇宙少年」という〝空想科学劇画誌〟の編集にあたっていたのが水木しげるであり、少年コミック研究会の実体が水木であったことはまちがいない。問題なのはこの少年コミック研究会がSFと怪奇を目指していたことだ。貸本劇画界の主流はほとんどハードボイルドやミステリーであり、貸本時代末期の四十年代になってほんの一部でのSFブームがあったにすぎないのだ。さいとうたかをの「ベリーファザー」や関一彦、沼田清のSF劇画も四十年頃のことであり、ましてやSF劇画短編誌など「鉄人」（つげ義春、辰巳ヨシヒロ、佐藤まさあき）が五巻出た他にはほんのわずかでしかない。そんな貸本マンガの歴史の中で、昭和三十四年という時期に出た空想科学劇画誌「宇宙少年」は実に特筆すべき存在だといえるだろう。
　その中心にいた当の水木自身の知識の中には、SFも含めた多くのものがあった。彼の作品を読んでいた限りでは、創元社の「世界大ロマン全集」も「世界怪奇小説全集」も元々社もHFも創元SFもあったし、ロジャーコーマンやハマーフィルムのB級怪奇映画やSF映画、そしてシュルレアリスム系列の画家達、柳田国男の民族学もあった。実に水木の中には種々雑多の一方向を向いた多くの知識があった。――そういった広範な水木の知識と独得のスタイルが「SFマンガ」として完全に結実しえなかったのは、貸本マンガという特殊な世界のせいであったことは水木自身の言葉を借りるまでもなかろう。
「とにかく食えなかった！」――そんな中で水木しげるは多くの作品を創りあげた。月刊誌や週刊誌の少年SFマンガのような派手さや軽快さは求むべくもないが、闘いを抜きにした静かな水木の幻想怪奇作品群は、今も不可思議なムードをたたえ、独自の世界を輝かせている。

『マンガ奇想天外』創刊号
昭和55年4月15日発行より